HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モンゴル語の小辞mini, cini, ni, cü, le, bolに関する考察 : 取り立ての観点から
Author(s)	娜仁托娅
Citation	北方言語研究, 1, 165-184
Issue Date	2011-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45238
Type	departmental bulletin paper
File Information	nls-1-10.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 1: 165-184（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2011）

［資料・研究ノート］

モンゴル語の小辞 mini, cini, ni, cü, le, bol に関する考察
― 取り立ての観点から ―

娜 仁 托 娅
（北海道大学大学院 専門研究員）

1. はじめに

1.1 研究の対象

本稿は、現代モンゴル語[1]で頻繁に用いられている mini, cini, ni, cü, le, bol という六つの小辞を取り立ての観点から考察することを試みるものである。これらの小辞は主に次のような点で類似している為、本稿では一つのグループの中で同時に扱うことにする。

[1] 先行する語の品詞的特徴が似ている。

これらの小辞は名詞だけではなく、名詞的に用いられる形容詞、数詞、形動詞などの後にも接続することができる。

[2] 格語尾の直後に接続することができる。

これらの小辞はすべての格語尾の直後に接続することができる。その際、通常は「名詞語幹 - 格語尾 - 小辞」の順番で接続する。

[3] 主語以外の文成分にも付くことができる。

これらの小辞は主語だけではなく、主語以外の文の成分、例えば、目的語などにも付くことができる。

[4] 任意の要素である。

これらの小辞は文中で省略可能な場合が多く、これらを省略しても、文の構成は大きく変わらない傾向がある。ただし、これらの小辞がある文とない文では意味とニュアンスが微妙に異なる場合がある為、「省略」と見なすべきかは検討を要する。

[5] 語用論的環境が似ている。

これらの小辞が付いた要素を特に注目させたい場合、これらが付いた要素を文頭または文の前のほうに置く傾向がある。ただし、それぞれ振る舞いに相違がある為、一律に同じ位置に現れ、同じ分布であるとは限らない。

[1] 筆者自身はモンゴル語チャハル方言の話者である為、本稿ではチャハル方言を中心に扱う。チャハル方言は、内モンゴルのモンゴル語諸方言の標準語として選ばれ、内モンゴル自治区錫林郭勒盟ショローンフフ・ホショー（正藍旗）のモンゴル人によって使用される。ただし、本稿で扱う小辞の用法に関しては方言差がそれほど大きくないと考えられる為、ハルハ方言などほかの方言も参照することがある。本稿で扱う問題に関しては、既にナラントヤ (2006，2007，2009a)でも発表し、これらをナラントヤ (2009b) としてまとめている。本稿はナラントヤ (2009b) の一部に加筆したものである。

1.2　研究の背景

取り立てに関する研究は日本語では積極的に行われている一方、モンゴル語ではあまり積極的に行われていないのが現状である。日本語における取り立ての先行研究に関しては、澤田 (2007)、沼田 (2009) に詳しい記述が見られる。代表的なものとして、宮田 (1948) (1980)、教科研 (1963)、鈴木 (1972)、奥津 (1974)、寺村 (1981) (1991)、沼田 (1986) (2009)、益岡 (1991)、益岡・田窪 (1992)、野田 (1995)、庵ほか (2004)、澤田 (2007) などがある。この中で、特に取り立ての全体像を示しているのは沼田 (1986)、寺村 (1991)、益岡・田窪 (1992)である。

「取り立て」の定義に関しては、例えば、沼田 (1986:108) は「とりたて詞」という用語を用い、「とりたて詞とは文中の様々な要素―これを自者と呼ぶことにする―をとりたて、これに対する他の要素―これを他者と呼ぶことにする―との論理的関係を示す語である」と定義している。また、庵ほか (2004:241) は「文中の要素に付いてその要素やその要素が表す出来事などに対する話し手の捉え方を暗示することを『取り立てる』と言い、そのことを表す助詞を『とりたて助詞』と言います」と定義している。

筆者は取り立てを「形式上は先行する要素に付き、構文上は先行する要素を強調し、意味上は事柄に対する話し手の心的態度や捉え方を暗示している形式である」と捉えている。

1.3　先行研究の問題点

モンゴル語では、通常、mini, cini, ni, cü, le, bol に共通する特徴として「主語のマーカーである」と解釈される場合が多い。しかし、実際のところ「1.1　研究の対象」でも既に述べたように、これらの小辞は主語以外の文成分、例えば目的語にも接続することが可能である。また、さまざまな格語尾の後に付けて用いることも可能である。これは、これらの小辞が主語だけに付くのではないということを裏付けている。

後程 3 節で述べるように、一部の先行研究では、ni, cü, le, bol に主題を提示するような取り立ての用法があると指摘されている場合がある。ただし、断片的な記述のみで、詳しい分析は行われていない。また、筆者の確認した限りでは、mini, cini, ni, cü, le, bol の用法全般に渡って徹底的に考察したものは確認されていない。特に、これらの形式を取り立ての観点から体系的に扱っている研究は現時点でまだ見当たらない。

1.4　本稿の構成

本稿の構成は、次の通りである。

[1]　まず、第 1 節（本節）では研究の対象である mini, cini, ni, cü, le, bol の類似点を挙げ、これらの小辞を一つのグループの中で論じる根拠を示す。その上で、研究の背景、問題点および論文の構成について述べる。

[2]　次に、第 2 節ではモンゴル語における取り立ての各手段を概観する。

[3]　そして、第 3 節では mini, cini, ni, cü, le, bol の主な意味・用法を考察した上、これらの小辞の類似点をまとめることを試みる。

[4]　最後に、第 4 節では、問題点および今後の課題について述べる。

2. モンゴル語における取り立て

モンゴル語では、話し手の発話する際の意図や必要に応じて、音声的、形態的、統語的手段により、または文字（表記）の上で取り立てを表す用法がある。

[1] 音声的手段：ポーズを置く、または強く発音するなど。

[2] 文字的手段：コンマやカッコ、ダッシュ「—」や感嘆符「！」などの記号で表すなど。

[3] 形態的手段：強調したい要素の後に、小辞または副詞的要素を付けるなど。

[4] 統語的手段：強調したい要素を文頭に置くか、または文頭へ移動させるなど。[2]

まず、音声的手段とは、話し言葉の際に取り立てられる要素を他の要素より最も注目させる為、ほかの要素と比べてより強く発音する、またはその後にポーズを置いて標示する方法を言う。このような用法は特に特定の話題をめぐる発話の中でよく見られる。

これに対し、文字的手段とは、書き言葉の際にコンマやカッコ、ダッシュ「—」や感嘆符「！」などの記号で表す方法を言う。これに関して、舍．罗布苍旺丹 (1961:369-370) は次の (1) (2) のような用例[3]を挙げ、「話し言葉ではポーズを置き、書き言葉では区切りにより主語を標示する用法がある」と述べている。例えば、次の用例では cerig「軍人」を一つの話題として取り挙げる際、話し言葉では cerig「軍人」の後にポーズを置くか強く発音し、書き言葉では(1) のように cerig「軍人」の後に区切りの記号を用いている。もし、このような手段が用いられない場合、(2) のように二通りの意味で解釈されてしまう可能性がある。つまり、(2) に見られるような意味上の曖昧さを避ける為に、このような音声的または文字的手段が用いられている。

(1) cerig, malagai-ban emüs-be.
軍人 帽子-再帰 被る-過去
「軍人は帽子を被った。」

(2) cerig malagai-ban emüs-be.
軍人 帽子-再帰 被る-過去
「① 軍人は帽子を被った。／② (誰かが) 軍人の帽子を被った。」

舍．罗布苍旺丹 (1961:369)

舍．罗布苍旺丹 (1961:369-370) に見られる記述は、モンゴル語における主語の標示に関するものである。本稿では、このような音声的手段と文字的手段をも「主題を取り立てる」用法の一つであると捉え、取り立ての形式の中に含めて記述する。

---

[2] これらの用法は福嶌 (2004:129) を参照の上、筆者がモンゴル語の文を分析したものである。元々、福嶌 (2004) は日本語とスペイン語両言語における主題現象を扱ったものである。

[3] 本稿では、現在の内モンゴル地域で使用されているウイグル式モンゴル文字による文語表記をローマ字転写し、グロスと訳を付けて示すことにする。なお、特に出典を記していないものは筆者の自作例である。

次に、形態的手段とは、小辞や副詞的要素を用いて取り立てを表す方法を言う。通常、モンゴル語の主語は主格で表される。主格は-φ(ゼロ) 接辞であり、形態上明確な格の標示はなされない。そして、主語を特に標示する場合、mini, cini, ni, cü, le, bol などの小辞を用いることがある。これに関して、巴图吉日嘎拉ほか (2003:273) は「主語を特に標示する場合、mini, cini, ni, cü, le, bol などの小辞を主語のマーカーとして用いる」と記述している。本稿では、このような小辞によって標示する方法をも「主題を取り立てる」用法の一つであると捉え、取り立ての形式の中に含めて記述する。

最後に、統語的手段とは、取り立てられる要素を最も注目させる為、それを文頭に置くか、または文頭へ移動させる方法を言う。これに関して、清格尔泰 (1999:427) はモンゴル語に強調する要素を文頭に置く用法があると記述している。例えば、次の用例 (3) (4) では、動作主・行為者を注目させたい場合、(3) のように bi「私」の部分を文頭に置いている。一方、動作対象を注目させたい場合、(4) のように tere-yi cini「それを」の部分を文頭に移動させている。

(3) bi tere-yi cini mede-xü ügei.
私 それ-対 2,小辞 分かる-未来 ない
「私はそれを知らない。」

(4) tere-yi cini bi mede-xü ügei.
それ-対 2,小辞 私 分かる-未来 ない
「それ(を)は私が知らない。」

清格尔泰 (1999:427)

ただし、以上で挙げた音声的、文字的、形態的、統語的手段は必ずしも一つ一つ別個の手段として用いられるとは限らず、複合的に用いられる場合もある。本稿では、小辞などによる形態的手段を主な分析対象とする。その為、次は 3.で mini, cini, ni, cü, le, bol の主な意味・用法を考察する。

3. モンゴル語の小辞 mini, cini, ni, cü, le, bol

モンゴル語における取り立ての形式に関して、東京外国語大学大学院 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点(TUFS)」(2006) は「モンゴル語には、文の中のある項をほかの項との関係で取り上げる取り立てがあり、取り立て助詞をはじめとするさまざま形式によって示される」と記述している。

そして、主な形式として次のものを挙げている。

表 1：モンゴル語における取り立ての主な形式[4]

助詞	取り立ての意味	日本語の類似形式
xürtele	意外性	「～さえ」・「～まで」
basa cü basa	並立	「～も」
cü gesen	並立	「～も」
bol	説明・定義に先立つ主題	「～は(･･･である)」
	際立たせ	「～こそ」・「～ぞ」
gejü	引用	「～とは」
gedeg ni	聞き手が知らないことの説明	「～というのは」
le	限定	「～のみ」・「～だけ」
	少ないという評価	「～しか(･･･ない)」
cü	並立	「～も」

TUFS (2006)より引用

筆者の確認した限りでは、先行研究の中で「モンゴル語における取り立ての主な形式」として明確に指摘し、その意味・用法を解釈しているものは TUFS (2006) のみである。ただし、TUFS (2006) は文法概略である為詳しい分析が確認されず、また mini, cini, ni, cü, le, bol をすべて含めていない点で本稿と異なっている。

3.1 mini, cini, ni, cü, le, bol の主な意味・用法

3.1.1 mini, cini, ni の主な意味・用法

モンゴル語では通常、mini, cini, ni は人称所属関係を表すと解釈され、次のような体系をなすとされる。[5]

	単数	複数
1 人称	mini	mani
2 人称	cini	tani
3 人称	ni	ni

小沢 (1986:104)

これらが現れる環境に関して、梅谷 (2003:214) は「名詞、数詞、形容詞、副詞、後置詞、動詞の副動詞形、動詞の形動詞形の直後に現れうる」と記述している。従来の研究では、mini, cini, ni は人称所属関係を表すほかに、「主語」「主題」を標示すると解釈される場合がある。例えば、Hammar (1983)、一ノ瀬 (1988a、1988b)、水野 (1991)、梅谷 (2003)、TUFS (2006) などである。次の(5)～(8)は人称小辞として解釈しにくい mini, cini, ni の用例である。

[4] TUFS (2006)では、ni を gedeg **ni**「～というのは」の形で挙げている。

[5] mani, tani という 2 つの小辞については現在のモンゴル語においてほとんど用いられない為、本稿では扱わないことにする。3 人称は単数・複数の区別がないとされる。

例えば、(5)では mini は話し手自身の行為に対して用いられている。元々mini は 1 人称所属関係を表す小辞であると認識されている為、話し手自身に関わるという傾向がある。その為前後の文脈や発話する環境によって話し手が自分自身に関して発話していることが明確な場合、通常はわざわざ mini を用いることは少ない。しかも、元々 (5) では小辞が用いられなくても文自体が成立する。それにも関わらず、ここであえて mini を用いると、小辞が用いられない文に比べて、先行する要素が注目されることによって文の切れ目が明確になり、またリズムを整えることによって話し手の発話する際の口調もやわらかくなる。

(5) namayi ire-megce **mini** sü-tai cai-yi ögxü-gerei.
私,対 来る-即時 1,小辞 牛乳-派生 茶-対 あげる-命希
「私が来たら、ミルクティを出してくださいね。」

Hammar (1983:113)

(6)では、ci が「あなた」に当たる為、cini が所属関係という解釈は成り立ちにくい。

(6) xöyi ! ebügen e. ci **cini** xen-tei xeregül xi-cixe-be de ?
おい 老人 呼び掛け 君 2,小辞 誰-共同 喧嘩 する-完成-過去 よ
「おい、おじいちゃん！ あなたったら、誰と喧嘩しているのよ！？」

吉儒木図 (1999:259)

本来、2 人称所属小辞とされる cini が厳密に人称しか標示しないのであれば、2 人称代名詞と共起することは不自然である。しかし、実際の用法上モンゴル語には (6) のような用法は頻繁に見られる。しかも、モンゴル語の電子コーパスである内蒙古大学 (2007) の用例収集では、2 人称代名詞に付く cini が人称代名詞に付く cini の用例数のうち約 33%を占めているというデータを得た (表 2 参照) 。なお、1 人称の場合は全体の 32%を、3 人称の場合は 35%を占めている。これにより、cini は 1 人称や 3 人称とほぼ同じ割合で 2 人称代名詞の後に用いられていることが観察できる。

表 2：人称代名詞に付く cini の用例数とその内訳

人称	1 人称		2 人称			3 人称		合計
代名詞	bi(単)	bide(複)	ci(単・普)	ta (単・尊)	tanar(複)	tere(単)	tede(ner)(複)	
cini	44	20	46	17	4	63	8	202
用例数(%)	64 (32%)		67 (33%)			71 (35%)		202 (100%)

(数字は用例の件数)

このような cini の用法について、一ノ瀬 (1988b:49-50) は「あなたの注目すべきあなた」の意味を表し、聞き手の注意を引く為であり、単独に ci と用いるより力強く、明確であると解釈している。そして、このように用いられる cini は相手を非難するニュアンスを含めている場合もあると指摘している。

(7) では cini が自然現象を表す語 borogan「雨」の後に用いられている。ここで仮にその直後に用いられる cini が通常通り 2 人称所属関係を表す小辞として解釈すれば、「あなたに(所属する)雨」という意味になってしまい、不自然である。元々、雨などの自然現象は非人称的であり、その後に人称を表す要素が現れない。従って、ここで用いられる cini が 2 人称所属関係を表しているとは解釈できない。

(7) ene borogan **cini** yexe oro-xu ügei yum bayi-na da.
この 雨 2,小辞 とても 降る-未来 ない である ある-現在 よ
「この雨はそんなに降らないようだね。」

清格尔泰 (1999:327)

また、(8)では 1 人称代名詞 bi「私」の後に ni が用いられている。もちろんここで用いられる ni を「第 3 者に所属している私」という意味でも解釈できなくはない。ただし、筆者の内省によると、通常、モンゴル語では話し手が自分自身のことを「第 3 者に所属している私」という意味で言う場合、1 人称代名詞の所属形よりむしろ普通名詞の所属形を用いるのが多いのではないかと考えられる。[6] 要するに、単なる人称所属関係を表す場合、わざわざ 1 人称代名詞 bi「私」の後に ni を用いることは少ない。その為、ここで用いられる ni は人称所属関係よりほかの意味・用法を持っていると解釈したほうがもっと適切であると考えられる。つまり、1 人称代名詞 bi「私」の後にあえて ni を用いると、小辞が用いられない文に比べて、先行する要素が注目され、話し手の発話する際の口調がやわらかくなる。

(8) xögeröxüi, bi **ni** Bugurul guwai biši bolbacu cinoa biši le de.
かわいそう 私 3,小辞 人名 敬称 ではない でも 狼 ではない小辞 よ
yagaxixular-iyan nada-aca iŋgijü maguxai sürde-cege-deg yum bui ?
なぜ-再帰 私-奪 このように 悪い 怖がる-共態-反復 である か
「かわいそうに、私は(あの怖い)ボラルさんでもないし、狼でもないよ。なぜ、私をこんなに怖がっているのかな？」

吉儒木図 (1999:9)

先行研究の一つである水野 (1991:42-56) は、2 人称代名詞 ci, ta の後に用いられる場合、mini は相手との心理的な距離を近づけたい状況を、cini は多少とも相手を非難する調子を、また ni は相手をなだめすかせたいようなニュアンスがあると記述している。実際にモンゴル語のコーパスから収集した用例を確認した際も、このような傾向が確認された。例えば、内蒙古大学 (2007) では、mini の出現用例数が全部で 2343 例であり、cini の出現用例数が全部で 3170 例である。

[6] 例えば、「第 3 者に所属する私」という意味で、「（彼の）息子である私」と言う場合、(tegün-ne) xüü ni bi「息子である私」とか、xüü ni「息子である（私）」などの形で、xüü「息子」のような普通名詞を省略しない場合が多いと考えられる。ちなみに、tegün-ne「彼／彼女の」、xüü は「息子」(普通名詞)、bi は「私」（代名詞）という意味に当たる。

そして、表 3 で表しているように、この中で親族名詞に付く mini の用例は全部で 667 件であるのに対し、親族名詞に付く cini の用例は 58 件であり、mini の用例が圧倒的に多かった。親族名詞には「親族名称」と「親族呼称」が含まれており、どちらにも話し手が指示対象に対する親近感を表す用語が数多く含まれている。これに mini が付くことにより、mini は話し手が指示対象に対する親近感を表す傾向があると推測される。なお、コーパスより収集した親族名詞に付く mini, cini の用例数とその内訳は次の通りである（表 3 参照）。

表 3：親族名詞に付く mini の用例数とその内訳

先行用語	eji, eme, 「母」	degüü 「弟/妹」	xüü 「息子」	xeüxen, oxin 「娘」	abu 「父」	xeüxed 「子供」	axa 「兄」	ebüge 「祖父」	合計
mini	173 (26%)	162 (24%)	153 (23%)	69 (10%)	54 (9%)	28 (4%)	21 (3%)	7 (1.1%)	667 (100%)
cini	1 (2%)	1 (2%)	21 (36%)	0 (0%)	26 (45%)	0 (0%)	0 (0%)	9 (15%)	58 (100%)

(数字は用例の件数)

一方、コーパスから収集した cini の用例を確認すると、好ましくないものを自分から遠ざけたい、または指示対象から距離を置きたいという話し手の心的態度を表す場合がかなり多かった。例えば、(9) のような罵り言葉に cini が用いられる用例は数多く確認された。これは元々、cini は 2 人称所属関係を表す小辞である為、話し手よりも聞き手に近づける表現になりがちで、聞き手寄りの立場を取ることが多いことに関係していると考えられる。

(9) nigur ögxü-bel xamar ab-xu ügei buxan xüjügüü siu, jolig **cini**!
顔 あげる-仮定 鼻 取る-未来 ない 種牛 首 よ くずめ 2,小辞
「顔をあげているのに、鼻は要らないという石頭だよ、くずめが！
(顔を立ててあげても潰してしまう石頭だよ、くずめが！)」

吉儒木図 (1999:465)

mini, cini に比べると、ni は mini のように話し手が指示対象に対する親近感を（あるいは親しくなりたいという意図や心的態度を）明確に表すこともなく、cini のように指示対象に対する嫌悪感（あるいは親しくなりたくない、距離を置きたいという心的態度）を明確に表すこともない。ni はむしろ指示対象に対する話し手の中立的立場（心的態度）を表す傾向があると考えられる。その為、ゼロ接辞で現れる形式と比べると、ni によって表れる話し手の判断や心的態度はそれほど強く表れない場合がある。ただし、(10) (11) のような非難や責めの意味を表す文に用いられる際、ni のこのような特徴がある程度強く表れる場合もある。

(10) cisu-bar urus-u-gsan **ni**!
血-造 流れる-挿入-完了 3,小辞
「この馬の骨が！」

(11) ergigü šidam ejen-degen. xoxi **ni**!
馬鹿 棒 主人-与 損失 3,小辞
「身から出た錆！(はね返り！)因果応報だ！」

吉儒木図 (1999:474)

さらに、ni が話し手の主観的判断を表している特徴は文末に用いられる ni の用法にも確認される。例えば、(12) (13) では ni が用いられない場合、不完全な文となり、文としては成り立ちにくい。しかし、ここで ni を用いると、話し手の主観的判断であるという感嘆詞のような機能が加えられ、文としては成り立つことができる。

(12) Ceriŋ guwai, odo yabu-xu uu? orui bol-xu **ni**.
人名 敬称 今 行く-未来 か 遅い なる-未来 3,小辞
「チランさん、今行こうか？遅くなるよ。」

Bürintegüs (2004:721)

(13) borogan oro-xu **ni**.
雨 降る-未来 3,小辞
「雨が降りそう。」

Hammar (1983:17)

このほかに、人称所属小辞は情報上の伝達機能があるという先行記述がいくつか見られる。例えば、水野 (1994) は所属小辞が文の構造における「旧情報」を表すマーカーであると記述している。次の (14) は筆者が収集した用例である。ここでは、ebügen emegen「おじいさんとおばあさん」が話題に初めて登場する際はゼロ接辞の形で現れている。そして、聞き手（読み手）にとって、既に承知されている話題の人物が再び言及される際、ebügen ni「おじいさんは」や emegen ni「おばあさんは」のようにそれぞれの後に ni が用いられている。

(14) erte uridu-yin cag-du ebügen emegen xoyar bayi-ju gene. ebügen **ni**
早い 昔-属 時代-与 爺 婆 二人 いる-並列 そうだ 爺 小辞
未知 **既知**
mal-iyan xaragul-ju, emegen **ni** xogula cai-ban xi-deg gene.
家畜-再帰 見張る-並列 婆 小辞 飯 茶-再帰 用意する-反復 そうだ
既知
「昔々、あるところにお爺さんとお婆さん二人がいたとさ。
お爺さんは家畜の面倒を、お婆さんは食事の用意をしていたとさ。」

Naranbilig (2002)

このような人称所属小辞が旧情報を表す特徴は小沢 (1986:106) でも指摘しているように、人称所属小辞を人称代名詞と比べた際にも確認できる。例えば、ene xen-u nom bui ?「これは誰の本ですか？」という問いに対し、属格形で minu nom「私の本」と答えることができる。しかし、小辞形で nom mini「本（我が）」とは答えることができない。これにより、属格形は新情報を表せるのに対し、小辞形は旧情報のみを表すと推測される。

ただし、筆者は mini, cini, ni に関して、その人称所属としての意味・用法を完全に否定するものではなく、人称所属関係で解釈できない用法を取り立てという枠の中で統一的に解釈することを試みた。もちろん、二つの意味のうち、どちらとも捉え得るものもあり、その境界性が曖昧で明確に区分されない場合もある。その為、mini, cini, ni の取り立ての用法はあくまでも mini, cini, ni の人称所属関係を表す用法の延長線上にあり、二つの意味・用法が決して対立的ではないものであると捉えている。

以上、mini, cini, ni の主な意味・用法を考察した。このように、mini, cini, ni は人称を正しく表示しない場合があり、さらに先行する要素を取り立てて、話し手の事柄に対する心的態度を暗示している為、本稿ではこれらを取り立ての形式であると捉えている。

3.1.2 cü, le の主な意味・用法

現段階で、cü, le に関する先行研究は非常に少ない。筆者の確認した限りでは、cü, le に関する代表的な研究は水野 (1994) のみである。それ以外はほとんど学習書や文法書における簡略な記述に限られている。水野 (1994) は cü, le を「情報制御マーカー」として捉え、これらを「統語的共通性」「機能の根本」「機能の対比」などいくつかの観点から考察している。

cü は通常、(15) の用例で示すように、累加の意味を表す場合が多いと解釈される。

(15) ci **cü** xeüxed-tei, bi **cü** xeüxed-tei.
君 小辞 子供-派生 私 小辞 子供-派生
「君も子持ちで、私も子持ちである。」
(MC:38145)

しかし、強調または限定の意味を表している用法も確認される。例えば、(16) では、xoyagula「二人で」という先行する要素があり、その中で話し手がとにかく自分のことに限定して言っている為、強調または限定の意味であると捉えられる。

(16) A：eyimü edör xoyagula yagu xi-ne ?
このような 日 二人で 何 する-現在
「こんな日に(私たち)二人で何をするか？」

B：cimayi bi mede-xü ügei, bi **cü** ger-ten sagu-gad nom-iyan üje-ne.
君,対 私 分かる-未来 ない 私 小辞 家-与 座る-分離 本-再帰 見る-現在
「あなたの事を私は知らない、とにかく私は家で本を読むことにする。」
Hammar (1983:79)

一方、le は通常、(17) の用例で示すように、限定の意味を表すと解釈される。例えば、(17) では le が gagca「ただ一つ」という限定の意味を表す語に呼応し、限定の意味をさらに強調している。

(17) xeüxen mini, jol jirgal gedeg bol gagca xü teŋri degere **le**
娘 1,小辞 幸運 幸せ という 小辞 ただ 小辞 天 上 小辞
bayi-dag yum siü.
ある-反復 である よ
「娘よ、幸せというのはただ天の上だけにあるのよ。」
(MC:19794)

そして、先行研究でも指摘されているように、cü, le は情報構造に関わる場合がある。例えば、(15) のような累加を表す cü の場合、その後ろが旧情報になることが多い。また、(16) のような強調や限定を表す cü の場合、また、(17) のような限定を表す le の場合は一般的に先行するなんらかの情報を前提とし、その中から一つの情報を選択して強調や限定をするため、同じく旧情報を表すことが多いと考えられる。

このほかに、水野 (1994) でも指摘されているように、cü, le の位置は被修飾要素の直後から修飾要素と被修飾要素の間に移動する場合がある。つまり、cü, le は修飾要素と被修飾要素の間に入りこむことができる。しかも、このような用法は単なる話し言葉だけではなく、書き言葉にも頻繁に見られる。例えば、(18) は修飾名詞と被修飾名詞の間に入り込む cü の用例である。ここでは、水がほんの一滴もないということを念押して強く言う場合、dusul usu「一滴の水」の間に cü を挿し込んでいる。これは cü, le が話し手の発話する際の意図により、先行する要素を取り立てている為であると考えられる。

(18) usun-u gaŋ-du dusul **cü** usu bayi-xu ügei bol-ju bür goguji-cixa-jai.
水-属 壺-与 滴 小辞 水 ある-未来 ない なる-並列 すべて 漏れる-完成-過去
「壺の水が一滴も残らずすべて漏れてしまった。」
Bürintegüs (2004:45)

次の (19) と (20) は形容詞と被修飾名詞の間に入り込んでいる cü, le の用例である。例えば、(19) では、sayixan ere「美男子」、nere xöndütei ere「声望家で威信ある男」、gaŋgaŋ gegencir xömün「お洒落で清潔な人」など修飾語と被修飾語の間に cü が入り込んでいる。そして、(20) では、olon xonog「多くの日」の olon と xonog の間に le が入り込んでいる。

(19) jalagu-dagan man-u ergümel ecige mani sayixan **cü** ere bayi-jai,
若い-与 我-属 義理 父親 1,小辞,複 美しい 小辞 男 いる-過去
nere xöndü-tei cü ere bayi-jai. gaŋgaŋ gegencir **cü** xömün bayi-jai.
声望 威信-派生 小辞 男 いる-過去 お洒落 清潔 小辞 人 いる-過去

「若い時、うちの義理のおやじは美男子でもあった。声望家で威信ある男でもあった。お洒落で清潔な人でもあった。」

Bürintegüs (2004:578)

(20) olon **le** xonog arixi-da-gsan-iyan büür =tüür mede-ne.
多い 小辞 日々 酒-派生-完了-再帰 ぼんやりと 分かる-現在
「何日間か酒を飲み続けたのをぼんやりと覚えている。」

吉儒木図 (1999:313)

(21) では、sara-du sagu-xu というのは「子供を生む、出産する」という意味を表す慣用句である。亀井ほか (1992:51-52) によると、慣用句とは組み合わせと意味が社会習慣的に固定している単語連結のことで、構成要素間の結合が緊密で、その間に他の形式を挿入するのが困難な場合があるという。その為、(21) は慣用句の間に le が用いられている珍しい用法である。このような le は実質的意味を表すのではなく、le が用いられない文と比べてみると、話し手の発話する際の口調を和らげ、リズムを整えていると考えられる。

(21) sara-du **le** sagu-la le gejü bayi-gsan, arbagad le xono-ju bayi-ga bui.
月-与 小辞 座る-過去 小辞 と ある-完了 十ぐらい 小辞 経つ-並列 ある-未完了 ある
「子供が生まれたと聞いたが、十日ぐらい経っているだろう。」

吉儒木図 (1999:383)

また、cü, le は本動詞（一部の形動詞と副動詞の変化形）や補助動詞の間に入り込み、先行する本動詞を取り立てることができる。動詞を取り立てる際、cü, le は日本語の「〜て」に当たる形動詞や副動詞の形と補助動詞の間に入り込むことができる。例えば、(22) では、並列を表す副動詞語尾-ju「〜て」と bayi-na「ある」という補助動詞の間に cü が入り込むことにより、先行する要素 uxila-ju「泣いて」と iniye-jü「笑って」を取り立てている。(23) はこれと似ている le の用例である。

(22) uxila-ju **cü** bayi-na, iniye-jü **cü** bayi-na.
泣く-並列 小辞 ある-現在 笑う-並列 小辞 ある-現在
「泣いてもいるし、笑ってもいる。」

(23) mal ni jil-ece jil ös-cü le bayi-na.
家畜 3,小辞 年-奪 年 増える-並列 小辞 ある-現在
「家畜が毎年増えるばかりである」

清格尔泰 (1999:383)

cü, le の使用により、先行する要素が注目され、cü, le が用いられない文に比べると、話し手の口調がやわらかくなっている。その為、動詞‐補助動詞の間に入り込む cü, le は先行する動詞を取り立てると同時に、話し手の発話する際の口調を和らげると考えられる。しかも、このような用法は二つの動詞の結合によって表される表現においても同様な解釈ができる。

このほかに、cü, le に関しては、次の (24) で示しているような用法も確認される。モンゴル語は SOV 型言語であり、通常は述語が文末に置かれる。述語は実質的意味を持ち、完全に独立的成分に当たる。その為、(24) の用例に見られるような述語の後に用いられる cü, le は実質的意味を持たず、感嘆詞のような役割を果たしていると考えられる。従って、(24) で用いられる cü（le も可能）は断定的判断を避け、結果的に話し手の発話する際の口調を和らげ、発話する際のリズムを整えていると解釈できる。

(24) bagši lama-yin xasiyan-u xagalga dotora-aca-ban tügjiye-tei.
師匠 ラマ-属 庭-属 門 中-奪-再帰 鍵閉め-派生
daguda-la **le**, daguda-la **le**, tayil-ju ögxü ügei.
呼ぶ-過去 小辞 呼ぶ-過去 小辞 開く-並列 あげる ない
「師匠ラマの玄関のドアは中から閉められている。呼んでも呼んでも開けてくれない。」
Bürintegüs (2004:67)

ただし、cü が用いられる文では文末表現が制約される場合がある。特に、極端値を表す文の中で cü が用いられる場合、文末に否定の表現が現れる傾向がある。例えば、極端値の意味を含む nige「一つ」が用いられる文で cü が現れる場合、否定文 (25) は成り立つのに対し、肯定文 (26) は非文とされる。

(25) ger-tü oru-tala nige **cü** xömün bayi-gsan ügei.
家-与 入る-限界 一人 小辞 人 いる-完了 ない
「家に入ると、一人もいなかった。」
Bürintegüs (2004:629)

(26) * ger-tü oru-tala nige **cü** xömün bayi-jai.
家-与 入る-限界 一人 小辞 人 いる-過去
「？家に入ると、一人もいた。」

以上、cü, le の主な意味・用法を考察した。つまり、ゼロ接辞で現れる形式に比べると、cü, le は先行する要素に付き、構文上その直前の要素を強調し、意味上話し手の発話する際の心的態度を暗示し、発話する際の口調を和らげている。その為、本稿ではこのような cü, le を取り立ての形式であると捉えている。

3.1.3 bol の主な意味・用法

先行研究では、bol を主語のマーカーであると記述する場合がほとんどである。現段階で、主題や取り立ての観点から bol を考察した研究はきわめて少ないと見られる。代表的なものとしては、Hammar (1983)、風間 (2003)、TUFS (2006) による記述が挙げられる。

例えば、TUFS (2006) は (27) (28) の用例を挙げ、bol を取り立ての形式の一つとして、説明・定義に先立つ主題「～は（･･･である）」と際立ち「～こそ」「～ぞ」を示すと解釈している。

(27) aguu yexe Lenin **bol** büxü delexei-yin Prolatari-nar-in bagši mön.
偉い 大 人名 小辞 全 世界-属 プロレタリアート-複-属 師匠 である
「偉大なるレーニンは全世界のプロレタリアートの師である。
(旧ソ連時代のスローガン) (説明・定義に先立つ主題)」

TUFS (2006)

(28) ene **bol** minu törö-gsen nutug, Moŋgol-in sayixan oron.
これ 小辞 私,属 生まれる-完了 故郷 モンゴル-属 美しい 大地
「これぞわが生まれ故郷、モンゴルの美しい大地。
（詩人ナツァグドルジの国民的詩『わが故郷』のリフレイン）（際立たせ）」

TUFS (2006)

Hammar (1983) はモンゴル語の小辞 bol の基本的な機能は主題のマーカーであると捉え、bol, ni を詳細に対照分析し、bol には主に次のような意味・用法があると記述している。

[1] marking the conditional. 「仮定条件を表す」
[2] marking the topic. 「主題を表す」
[3] marking contrast. 「対照を表す」
[4] marking definiteness. 「限定を表す」

Hammar (1983:157)

モンゴル語では、bol が情報上の伝達機能があるという先行記述がいくつか見られる。例えば、水野 (1994) は bol が「情報制御マーカー」であると記述している。次の用例 (29) では、初めて話題に登場する人物は man-u gurbadugar abaga「私の三番目の叔父」のように、ゼロ接辞の形で現れている。そして、話題の人物に再び言及される際、tere **bol**「彼は」のように bol が用いられている。

(29) man-u gurbadugar abaga jun-u cilöge-ber nutug-tagan ire-le,
私たち-属 第三 叔父 夏-属 休暇-属 故郷-与 来る-過去
未知
tere **bol** oron-u cirig-in togorig-un neliyed yexe noyan yum.
彼 小辞 地域-属 軍-属 区-属 かなり 大きい 役人 である
既知

「私の三番目の叔父は夏休みに故郷に帰って来た。彼は自治区における軍区のかなり偉いの役人である。」

吉儒木図 (1999:266)

通常、モンゴル語ではゼロ接辞で現れる名詞の主格形それ自体が新情報を担っている場合が多い。これに対し、bol のような有標のマーカーは既知のもの、または旧情報であることを表す場合に用いられる傾向がある。bol はまた「A **bol**-，B **bol**-」の形で表れる場合がある。ただし、一回だけ現れる際は主題を表す場合が多く、二回、または二回以上現れる際は対比を表す場合が多い。

(30) alta **bol** sira, möŋgü **bol** cagan.
金 小辞 黄色い 銀 小辞 白い
「金は黄色い、銀は白い。」

このほかに、bol は文末に現れる場合がある。清格尔泰 (1979:403) は、(31) で bol が疑問や不安のニュアンスを、(32) で疑問や戸惑いのニュアンスを含めていると述べている。

(31) xarin yamar **bol** da ?
しかし どんな 小辞 よ
「しかし、どんなのだっけ？」

清格尔泰 (1979:403)

(32) ai ! yagu **bol** da !
感 何 小辞 よ
「えっ、何だっけ！」

清格尔泰 (1979:403)

以上、bol の主な用法と意味を考察した。先行研究では、主語を主題として取り立てる場合を扱っている場合が多い。前にも述べたように、実際の用法上、bol は主語のみを主題として取り立てるのではなく、目的語を取り立てる上、このほかにも文の任意の要素を取り立てることができる。その為、本稿では bol を取り立て小辞として捉えている。

2 節では mini, cini, ni, cü, le, bol の主な用法と意味を考察した。次は、3 節ではこれらの小辞に見られる類似性をまとめることを試みる。

3.2 mini, cini, ni, cü, le, bol の主な類似点

mini, cini, ni, cü, le, bol は「はじめに」で既に述べたように、統語的に類似している点がある上、意味的にも次のような点で類似していると考えられる。

[1]　先行する要素を取り立てる機能を持っている。

通常、モンゴル語の主語は主格で表される。主格は-φ(ゼロ)接辞であり、形態上明確な格の標示はされない。しかし、実際の言語生活の中では話し手が発話する際の伝達内容の必要に応じて主語を標示する必要がしばしばあり、その際 mini, cini, ni, cü, le, bol などの小辞が頻繁に用いられる。その為、従来の研究ではこれらの小辞が「主語のマーカーである」と解釈されている。

また、これらの小辞は主語のみではなく、主語以外の文の成分、例えば、目的語などをも取り立てることができる。このほかに、格語尾の後にも付き、先行する成分を取り立てることができる。なお、本稿では、主題標示を「取り立ての形式の一つである」と捉え、mini, cini, ni, cü, le, bol を取り立ての観点から解釈することを試みた。

[2]　強調を表す。

通常、モンゴル語ではゼロ接辞で現れる無標の形が話し言葉では特に音声上の強勢を置かない限り、客観的叙述に当たり、強調表現にはならない。これに対し、mini, cini, ni, cü, le, bol は有標の形である為、無標の文に比べてみると、なんらかの強調をしていると推測される。つまり、これらの小辞は該当要素自体に焦点を当て、強調している。例えば、cü, le のこの特徴は話し手の発話する際の意図により、その位置が被修飾要素の直後から修飾要素と被修飾要素の間に移動し、先行する要素を強調する点に表れている。

また、一つの文脈の中で、mini, cini, ni, cü, le, bol が一回だけ現れる際は強調を表し、二回、または二回以上現れる際は対比を表す傾向がある。

(33) odo-tai　teŋri　degere　**mini**　bayi-na, orcilaŋ　delexei　doora　**mini**　bayi-na.
星-派生　天　上　1,小辞　ある-現在　世界　天下　下　1,小辞　ある-現在
「星の輝く空は私の上にある、大千世界は私の足元にある。」
(MC:25272)

(34) sayin　**ni**　arbin,　magu　**ni**　cöxen.
良い 3,小辞　多い　悪い 3,小辞　少ない
「良いのが多い、悪いのが少ない。」
清格尔泰 (1999:192)

(35) nidü　**bol**　üje-deg,　cixi　**bol**　sonos-u-dag,　xamar　**bol**　ünür-te-deg.
目　小辞　見る-反復　耳　小辞　聞く-挿入-反復　鼻　小辞　嗅ぐ-派生-反復
「目は見る、耳は聞く、鼻は嗅ぐ。（それぞれの役割に関して）」

(36) ci　**cü**　xeüxed-tei,　bi　**cü**　xeüxed-tei.
君　小辞　子供-派生　私　小辞　子供-派生
「君も子持ちで、私も子持ちである。」
(MC:38145) ((15)の再掲)

(37) xele-deg **le** üge, sana-dag **le** sanaga.
言う-反復 小辞 言葉 思う-反復 小辞 考え
「言うのは言葉、思うのは夢。（口先だけのことで実際の行動がない）
阿拉坦朝魯・嘎日迪 (2000:179)

[3] 情報構造と関わる。
通常、モンゴル語では、ゼロ接辞で現れる名詞の主格形それ自体が新情報を担っている場合が多い。これに対し、mini, cini, ni, cü, le, bol は既知のもの、または旧情報を表す場合が多いと考えられる。

[4] 話し手の主観的判断や心的態度を表す。
物事を客観的に述べる文の場合、断定的表現に当たる為話し手の発話する際の心的態度と関連しない場合が多い。つまり、小辞などが用いられない場合、文自体が断定的表現になりがちである。しかし、このような小辞を用いると、断定的表現より話し手の発話する際の口調がやわらかくなる場合が多い。
例えば、mini は話し手が指示対象に対する親近感を示し、一方 cini は話し手が指示対象に対する疎遠や嫌悪感を示す場合が多い。ni は mini のように親近感を（あるいは親しくなりたいという意図や心的態度を）明確に表すこともなく、cini のように嫌悪感を(あるいは親しくなりたくない、距離を置きたいという心的態度を)明確に表すこともない。mini, cini に比べてみると、ni はむしろ指示対象に対する話し手の中立的立場（心的態度）を表す傾向があると考えられる。その為、ゼロ接辞のみで現れる形式と比べると、ni によって表れる（話し手の判断や心的態度）はそれほど強く表れない場合がある。ただし、非難や責めの意味を表す文に用いられる際、ni のこのような特徴が強く表れる場合がある。
また、文末に現れる bol は疑問や不安、戸惑いなどのニュアンスを含める場合がある。このほかに、修飾要素の間に入り込む cü, le は先行する要素を取り立てるのと同時に、話し手の発話する際の口調を和らげ、話をスムーズに運ぶ為のリズムや調子を整える場合がある。特に、文末に用いられる cü, le は実質的な意味がなく、話し手の発話する際の口調を和らげ、話をスムーズに運ぶ為のリズムや調子を整える役割を果たす場合がある。

以上のように、筆者は mini, cini, ni, cü, le, bol の全体に関して、先行研究で指摘されている「主語／主題のマーカー」以外に用いられる機能・用法をも含め、取り立てという枠の中で一括して解釈することを試みた。

4. 問題点と今後の課題

本稿では、モンゴル語の小辞 mini, cini, ni, cü, le, bol の主な意味・用法を取り立ての観点から考察することを試みた。ただし、取り立てという概念は日本語研究者の間でも一定していないものである為、これをモンゴル語に応用するには基準が不明確であるという問題点も残されている。
今後はモンゴル語の特徴にあったモンゴル語独自の取り立ての概念と基準をより明確に定め、これらの小辞の意味・用法をもっと詳細に分析する必要があると考えている。

参考文献

阿拉坦朝魯・嘎日迪 (2000)『蒙古語語法　義務教育初級中学課本』　内蒙古教育出版社.

巴図吉日嘎拉・哈日巴拉・普日布・丹巴 (2003)『中学蒙語語法讀本』　内蒙古教育出版社.

Bürintegüs (2004) *Mmoŋgol-in šilidig ügülelge-yin tegüberi*　(モンゴル語：奥付『モンゴルの精選小説』)　内蒙古科学技術出版社.

清格尔泰 (1979)『現代蒙語語法』　内蒙古人民出版社.

――――― (1999)『現代蒙語語法』　(修訂版)　内蒙古人民出版社.

庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2004)『中上級を教える人の為の日本語文法ハンドブック』　スリーエーネットワーク.

一ノ瀬恵 (1988a)「モンゴル語の人称代名詞と人称関係小辞について」『日本モンゴル学会紀要』19:15-29.　日本モンゴル学会.

――― (Icinusai maigümi) (1988b)“Moŋgol xelen-u gurban beye-dü xamiyadagulxu sula üge-yin xögjil　xobiral bolon tegün-ü oncugui-bar xereglejü bayiga bayidal-un tuxai”（モンゴル語の人称関係小辞の変化及びその特殊用法について)『内蒙古大学科研雑誌』33:27-53.

福嶌教隆 (2004) 中川正之・西川義弘・益岡隆志(編)「スペイン語の主題に関する記述的研究」『主題の対照』(シリーズ言語対照　外から見る日本語　第 5 巻)　くろしお出版.

Hammar, Lucia B. (1983) *Syntactic and pragmatic options in Mongolian : a study of bol and ni (China)* UMI(University Microfilms International) Dissertation Services.

久野暲 (1973)『日本文法研究』　大修館書店.

吉儒木図 (1999)『潮洛濛 文学精品(三) 献給叶子的歌』(モンゴル語)　内蒙古人民出版社.

亀井 孝・河野六郎・千野栄一(編) (1992)『言語学大辞典：術語編　第 6 巻』　三省堂.

風間伸次郎 (2003)「アルタイ諸言語の 3 グループ(チュルク、モンゴル、ツングース)及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているか ― 対照文法の試み」アレキサンダー ボビン・長田俊樹(共編)『日本語系統論の現在　国際日本文化研究センター共同研究報告』249-338　国際日本文化研究センター.

教科研東京国語部会・言語教育研究サークル (1963)『文法教育 その内容と方法』　むぎ書房.

益岡隆志 (1991)『モダリティの文法』くろしお出版.

益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版.

宮田幸一 (1948)『日本語文法の輪郭』　三省堂.

――――― (1980)「格助詞と取り立て詞」『言語』9-12.　大修館書店.

水野正規 (1991)「モンゴル語の所属小辞」『日本モンゴル学会紀要』22:42-56. 日本モンゴル学会.

――――― (1994)「モンゴル語の所属小辞 ч・л」『日本モンゴル学会紀要』25:45-59.　日本モンゴル学会.

内蒙古大学 (2007) *100 tümen üge-tei odo üye-yin Moŋgol xele bicig-ün deyita xömörge* (100 万語現代モンゴル語コーパス) 内蒙古大学(構築) (本稿では MC と略す：2007 年 7 月 21 日入手データ).

Naranbilig (2002) *Mmoŋgol üliger* (モンゴル語：奥付『モンゴルの物語』)　内蒙古人民出版社.

ナラントヤ (2006)「モンゴル語の主題小辞 “bol” “ni” ―日本語の助詞「は」「が」との対照を通して―」『研究論集』6:23-40. 北海道大学大学院文学研究科.
(『日本語学論説資料第 43 号』『中国語学論説資料第 49 号』に収録) .
――――― (2007)「モンゴル語の取り立て小辞 cü, le―日本語の助詞「も」「だけ」との対照を通して―」『研究論集』7:37-58 北海道大学大学院文学研究科.
(『日本語学論説資料第 45 号』に収録) .
――――― (2009a)「モンゴル語の小辞 mini, cini―取り立ての用法を中心に―」『研究論集』8:125-147. 北海道大学大学院文学研究科.
――――― (2009b)「モンゴル語の取り立て小辞 mini, cini, ni, cü, le, bol―日本語との対照を中心に―」 北海道大学大学院文学研究科 博士論文(未公刊；要旨として『研究論集』10:313-315. 北海道大学大学院文学研究科、2010).
野田尚史 (1995)「文の階層構造からみた主題ととりたて」 益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』 くろしお出版.
沼田善子 (1986)「とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本 武『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社.
――――― (2009)『現代日本語とりたて詞の研究』 ひつじ書房.
奥津敬一郎 (1974)『生成日本文法論』 大修館書店.
小沢重男 (1986)『増補 モンゴル語四週間』 大学書林.
澤田美恵子 (2007)『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』 くろしお出版.
舍. 罗布苍旺丹 (1961)『現代蒙古語』 内蒙古人民出版社.
鈴木重幸 (1972)『日本語文法・形態論』 むぎ書房.
曽我松男 (1975)「係り助詞「も」の構造についての一考察」『日本語教育』26:27-43.
寺村秀夫 (1981)「ムードの形式と意味(3)―取り立て助詞について―」『文芸言語研究言語編 6』 筑波大学文芸言語学系.
――――― (1991)『日本語のシンタクスと意味 2 』 くろしお出版.
東京外国語大学大学院 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」(TUFS) (2006) 「モンゴル語・文法」http://coelang.tufs.ac.jp/modules/mn/gmod/index.html (項目:「取り立て」2008 年 1 月 22 日閲覧)
梅谷博之 (2003)「モンゴル語の二人称所属小辞」『東京大学言語学論集』22:209-232. 東京大学人文社会系研究科・文学部言語学研究室.

Mongolian Particles *mini, cini, ni, cü, le,* and *bol*: from the Viewpoint of *toritate*

Narantuya
(Research fellow of the Graduate School of Letters, Hokkaido University)

This paper concerns six particles *mini, cini, ni, cü, le,* and *bol*, which are used frequently in modern Mongolian. In previous descriptions, these particles have been treated separately and regarded, without sufficient evidence, as markers with various functions such as subject, topic, focus, contrast etc. The author first points out common syntactic and pragmatic features of these particles, and then tries to unify them from the viewpoint of Japanese *toritate* particles. The function of *toritate* seems not to be fully defined, but relates to stand out a sentence element with implying some modal meaning.

The present paper is, therefore, a preliminary attempt to analyze these Mongolian particles by contrast with Japanese *toritate* particles.

（ナラントヤ　nana315@let.hokudai.ac.jp）